

平成 25 年度研究プロジェクト「朝鮮半島のシナリオ・プランニング」
分析レポート

2013 年の北朝鮮国内政治

平井久志（共同通信客員論説委員）

北朝鮮は昨年 12 月 12 日、事実上の長距離弾道ミサイルである人工衛星「光明星 3 号」2 号機の打ち上げに成功した。これに対し、国連安全保障理事会は 2013 年 1 月 23 日に、北朝鮮の主張する人工衛星発射は長距離弾道ミサイル技術を利用したもので国連制裁決議違反に当たると非難し、制裁強化決議を全会一致で採決した。北朝鮮外務省は同日、すぐに国連安全保障理事会による制裁強化決議案の採択を非難する声明を発表し、「米国の制裁圧迫に対処し、核抑止力を含む自衛的な軍事力を拡大、強化する物理的対応措置を取るようになる」と 3 度目の核実験を示唆した。

北朝鮮は 1 月 27 日に「国家安全・対外部門の幹部協議会」を開き、金正恩第 1 書記が「国家的な重大措置を取る断固たる決心」を表明した。さらに 2 月 3 日に党中央軍事委員会拡大会議を開催し、金正恩第 1 書記が「国の安全と自主権を守る上で綱領的な指針となる重要な結論」を下した。そして、北朝鮮は 2 月 12 日、咸鏡北道吉州郡豊溪里で 3 回目の核実験を行った。

北朝鮮の核実験への国際的な非難が強まる中で、北朝鮮は 3 月 5 日、朝鮮人民軍最高司令部報道官声明を発表し、米韓合同演習が本格化する 3 月 11 日から「朝鮮戦争の休戦協定を白紙化する」と表明した。さらに翌 3 月 6 日には、党機関紙「労働新聞」は「われわれは精密な核攻撃でソウルのみならずワシントンまで火の海にする」と威嚇する軍幹部の声を報道した。

国連安全保障理事会は 3 月 7 日、北朝鮮の 3 度目の核実験を非難し制裁を大幅に強化する決議案を全会一致で採択した。

北朝鮮の祖国平和統一委員会は、国連安全保障理事会の制裁強化決議採択に対抗し、3 月 8 日、南北不可侵に関する過去のすべての合意の全面破棄を宣言し、1992 年に発効した南北非核化共同宣言の「全面白紙化」と板門店の南北直通電話の断絶を表明した。朝鮮人民軍最高司令部は 3 月 26 日声明を発表し、米本土や太平洋地域の米軍基地、韓国を攻撃対象とするミサイル部隊など全ての野戦砲兵部隊が「1 号戦闘勤務態勢」に入るとした。

朝鮮労働党は 3 月 31 日、党中央委員会 2013 年 3 月総会を開き「経済建設」と「核開発」を同時に進める並進路線を決定した。党の人事では、朴奉珠党部長を政治局員、玄永哲軍総参謀長、金格植人民武力部長、崔富一人民保安部長を政治局員候補に選出した。

翌 4 月 1 日に最高人民会議第 12 期第 7 回会議が開催され、経済改革派とされる朴奉珠元首相（党政治局員）を首相に再起用した。また、核抑止力を「質、量ともに強化する」と明記した法令を採択し核保有を法制度化。宇宙開発に関する法令も採択し「国家宇宙開発局」の設置を決定した。さらに、金正角前人民武力部長と李明秀前人民保安部長を国防委員から更迭し、金格植人民武力部長と崔富一人民保安部長を後任の国防委員に選出した。

北朝鮮は 4 月 2 日には原子力総局報道官がウラン濃縮を含め、寧辺にある他の核施設の

稼働を明言した。2007年の6カ国協議合意に基づき稼働を停止した寧辺の5000キロワット黒鉛減速炉を再稼働させると表明した。

韓国政府高官は4月5日に、北朝鮮が4月初め、新型中距離弾道ミサイル「ムスダン」（射程約2500～4千キロ）2基を列車で日本海側に移動させ、発射台付きの車両に搭載したことを確認したと声明した。北朝鮮はさらに短距離ミサイル「スカッド」や中距離ミサイル「ノドン」数発も日本海側に配置していることが探知され、これらのミサイル発射に対する国際的な憂慮が高まった。

しかし、韓国全土で3月初めから2カ月にわたり展開してきた米韓合同野外機動訓練「フォールイーグル」が4月30日に終了すると、北朝鮮は挑発路線から対話路線に転換した。5月7日には日本海側に配置されていた「ムスダン」2基が発射台から撤去されたことが確認され、ミサイル部隊などに発令されていた「1号戦闘勤務態勢」も解除された。

米韓両国は「フォールイーグル」後にも、米空母「ニミッツ」が参加して5月13、14日に米韓合同海上訓練を行うなどしたが、北朝鮮の対応は比較的自制されたものに終わった。

小泉純一郎元首相の政務秘書官を務めた飯島勲内閣官房参与が5月14日から17日まで訪朝した。金正恩第1書記の特使として崔龍海軍総政治局長が5月22日から24日まで訪中した。崔龍海軍総政治局長は習近平国家主席との会談で「関係各国と共に努力し、6カ国協議などさまざまな形式の対話と協議を通じて関連問題を適切に解決したい」と表明し、対話意志を示した。

金正恩第1書記は6月4日付でアピール文『『馬息嶺速度』を創造して社会主義建設の全ての戦線で新たな全盛期を開いて行こう』を発表し、「馬息嶺速度」の経済建設キャンペーンを開始した

南北対話でも祖国平和統一委員会報道官は6月6日に「特別談話文」を発表し、開城工業団地の正常化や中断している金剛山観光事業の再開を話し合う南北当局間会談を開催することを韓国に提案した。

国防委員会スポークスマンは6月16日に「重大談話」を発表し、米国に対し朝鮮半島の緊張緩和に向け前提なしで高官会談開催を提案した。北朝鮮は米国が核兵器を放棄するまで自分たちも核兵器を放棄しないと、核放棄の条件を「世界の非核化」としていたが、この重大談話では「朝鮮半島の非核化」が金日成、金正日総書記の遺訓であるとし「朝鮮半島の非核化」を目標とするという従来の主張に戻った。

さらに金桂冠第1外務次官が中国との戦略対話のために6月18日から22日まで訪中し、中国の張業遂外務次官と中朝戦略対話で「北朝鮮は6カ国協議を含むあらゆる形式の対話に参加し、核問題を平和的に解決することを望む」と表明した。

北朝鮮の2013年の最大の行事とされた7月27日の「祖国解放戦争勝利60周年」（朝鮮戦争休戦協定締結60周年）では、大規模な軍事パレードが実施された。しかし、新兵器などは登場せず、崔龍海軍総政治局長が金正恩第1書記の委任を受けた演説でも「核兵器」や「核保有国」への言及はなく、「経済文化建設と人民生活向上を焦眉の課題としているわれわれにとって平和的環境はこの上もなく貴重なものである」と声明するなど自制された内容だった。また、この行事に参加するため中国の李源潮国家副主席が7月25日から28日まで訪朝した。金正恩第1書記は軍事パレードでも李副主席にパレードの内容を説明す

るなどして中朝関係修復をアピールした。

北朝鮮は最高人民会議常任委員会の8月26日付政令で8月25日の「先軍節」を2014年から祝日にするとした。金正恩政権は金正日総書記が1960年8月25日に金日成主席とともに近衛ソウル柳京守第105戦車部隊を訪問した日を先軍政治のスタートとしているが、この日を祝日にすることで金正恩政権も「先軍路線」を歩むことを明確にした。

金正恩第1書記はその「先軍節」である8月25日に「金正日同志の偉大な先軍革命思想と業績を永遠に輝かそう」という談話を発表した。この談話は「金正日同志の卓越した先軍革命指導があったがゆえに、人民軍が無敵必勝の革命強兵になり、わが国が人工衛星製作・打ち上げ国、核保有国となって白頭山強国の威容を高くとどろかすことができた」と事実上の長距離弾道弾の発射である人工衛星打ち上げや核保有を金正日総書記の業績として称えた。

しかし、この談話はその一方で「党の指導は人民軍の生命であり、党の指導を抜きにしては人民軍の威力について語ることはできない」、「人民軍将兵は、いかなる試練に直面し、情勢がどう変わろうとも、ただ党と首領だけを思い、党と首領を決死擁護するという一つの思想、一つの覚悟で胸を燃やさなければならない」と強調し、党の軍への指導を強調した。

金正恩政権は「主体（チュチェ）、先軍、社会主義の道」を基本路線としている。「先軍」路線を踏襲することを表明しながらも、その内実面では「先党」ともいうべき「党による軍への指導」が強調されている。

北朝鮮は建国65周年の9月9日には労農赤衛軍による軍事パレードが行われたが、兵器などのパレードは小規模なものだった。朴奉珠首相が行った慶祝報告でも核兵器や核保有国には言及されず自制されたものだった。

金正恩政権の2013年の国内政治は国際世論の反対を押し切って昨年12月の人工衛星打ち上げ、今年2月の核実験を強行し、それに対するそれぞれの国連安全保障理事会の制裁強化決議に反発し、朝鮮戦争の休戦協定白紙化や南北間の不可侵合意の破棄などを表明し、「ソウルやワシントンに火の海にする」などと威嚇する挑発路線を続けたが、米韓合同軍事演習が終了した5月からは一転して対話路線に転換した。

金正恩時代の統治の最大の特徴は「党の復権」である。金正恩氏が最初に就いた最高司令官が党政治局の決定であったように党の機関主義が復活しつつある。3月31日に党中央委員会を開催し、その決定を受けて翌日の4月1日に最高人民会議が開かれたことも金日成時代の党の復権、党の機関決定の復活を示した。

しかし、金正恩政権がスタートして約2年が経過する中で興味深い現象が起きつつある。目まぐるしいまでに軍幹部の交代が行われた。北朝鮮軍部の交代の状況は以下の通りだ。金格植相参謀長の更迭は公式には確認されていないが、李永吉大將が後任の総参謀長に就任した可能性が高い。

軍総政治局長

趙明禄（1995・10） 空席（2010・11 趙明禄氏死亡） 崔龍海（2012・4 第4回党代表者会）

軍総参謀長

金格植(2007・4) 李英鎬(2009・2) 玄永哲(2012・7) 金格植(2013・5) 李永吉(2013・8?)

人民武力部長

金永春(2009・2) 金正角(2012・4 第4回党代表者会) 金格植(2013・4 最高人民会議) 張正男(2013・5 朝鮮人民内務軍協奏団の公演観覧報道で確認)

軍総参謀部作戦局長

李明秀(1997・4) 金明国(2007・4) 崔富一(2012・11?) 李永吉(2013・3) 不明(2013・8)

人民保安部長

朱霜成(2004・7) 李明秀(2011・4) 崔富一(2013・2)

国家安全保衛部長

空席(金正日時代は空席で金正日総書記が事実上兼務、2009・9から禹東則氏が第1副部長) 金元弘(2012・4)

また、今年3月31日の党中央委員会2013年3月総会では、玄永哲軍総参謀長(当時)金格植人民武力部長(同)崔富一(同)人民保安部長を政治局員候補に選出した。玄永哲軍総参謀長の前任者の李英鎬総参謀長が党政治局常務委員であったことを考えれば、玄永哲総参謀長が党政治局員候補でしかないということは2段階低い処遇である。

党政治局では軍の現職幹部は李炳三人民内務軍政治局長程度で、ほとんどポストを占めていない。軍出身者という範疇では金永春党部長、李勇武国防委副委員長、金元弘国家安全保衛部長が政治局員、呉克烈国防委副委員長、金正燮国家安全保衛部政治局長、崔富一人民保安部長が政治局員候補である。金正日時代に比べると党政治局における軍部の比重は明確に低下している。

一方で、軍幹部の中では崔龍海軍総政治局長が次帥の軍階級を持ち、金京玉党組織指導部第一副部長、金慶喜党政治局員、朴道春党政治局員、張成沢党政治局員が大将の軍事称号を持つなど、もともとは軍人ではない党人が軍の階級を持つという現象が起きている。旧社会主義国家では軍人が「軍服を脱いで背広を着て」党の要職について党を支配するという現象があったが、北朝鮮では、は党人が「背広を脱いで軍服」を着て軍を統制するという現象が起きている。

北朝鮮では昨年7月に李英鎬総参謀長が当然解任されるという事件が起きた。その後、金正日時代の軍長老たちが次々に軍の一線から退くという現象が顕著になっている。

金正恩第1書記の現地指導ではこれまでほとんど公式報道に名前が出たことのないような上將や中將クラスの軍人が同行し、新たな側近勢力が形成されつつある。その先頭に立っているのが李永吉軍作戦局長と張正男人民武力部長だ。この2人は8月28日の報道で大将昇格が確認された。また、北朝鮮メディアは8月28日に金正恩第1書記がサッカー競技を観覧した記事で李永吉大将を張成沢国防委副委員長と張正男人民武力部長の間で報じ、総参謀長就任の可能性を示唆した。

金正恩第1書記は政権をスタートされて約2年間に軍の再編を大きな抵抗なく実施し、自らの側近勢力に変えて行った。先軍を掲げながらも、「軍への党の指導」が強調され、党が復権し、党の機関主義が定着しつつある。

金正恩第1書記のリーダーシップは次第に強化されつつあるとみられる。金慶喜党政治局員、崔龍海軍総政治局長、張成沢国防委副委員長が金正恩第1書記を支えているが、特に金日成主席の娘であり、金正日総書記の妹である金慶喜党政治局員の役割が重要とみられる。その意味で、金慶喜党政治局員の健康問題を注視する必要がある。

(2013年9月20日記)